

本日の学び 「銀貨を見なさい」テキスト：マルコ12章13節-17節

【理解の手がかりとして】

イエス様は言われた。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」（12:17）と。この「神のものは神に」という言葉がイエス様が仰りたいことの中心。

ファリサイ派やヘロデ派の者たちがイエス様のもとにきてこう言った。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています」（12:14）と。これだけ聞くと、とても真摯な態度のように思えるが、しかしそれは仮面をかぶった態度であって、「人々は、イエスの言葉じりをとらえて陥れようとして」（12:13）とあるように、大変いやらしい思惑の中で派遣されてきた。※「人々」（12:13）とは「祭司長、律法学者、長老たち」（11:27）のこと。

彼らは言った。「あなたは真実な方」（12:14）だと。この「真実な方」とは神様にのみ用いられる言葉。それは「神の啓示をもたらす者」という意味を持つ。本来なら、イエス様の本質を知り、真心からの敬意をもって用いられるべき言葉である。しかし彼らは、その大切な言葉を権力争いの道具として悪用する。実に皮肉っぽく持ち出すのである。あとに続く「（あなたは）人々を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられる」（12:14）との言葉も、大変しらしらしく感じられる。まさに「下心」（12:15）が見え見えである。

そしてそのトラップ（罠）のかけ方がまた酷い。彼らはこう問うた。「ところで、皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか。適っていないでしょうか。納めるべきでしょうか。納めてはならないのでしょうか」（12:14）と。とても意地の悪い質問である。

というのは、当時、ユダヤに対するローマの支配は決定的で、その長たるローマ皇帝に従うことは、ユダヤ人である限り避けることの出来ないものだった。ゆえに、ここで彼らが投げかける「皇帝に税金を納めるべきか、否か」という問いに対して、当然誰しも「そうだ」と答えるしかなかった。そのことを全く承知の上で、彼らはイエス様に迫った。

この罠は巧妙だった。彼らが、一方でユダヤ人の宗教的規律である「律法」を持ち出している点である。これはユダヤ人にとっては泣き所で、律法（神）に従うべきか、皇帝に従うべきかとの二択を迫っているわけである。でもどちらを選んでも窮地に立たせられる・・・すなわち「皇帝に税金を納めなさい」と言えば宗教的反逆者として、反対に「納めなくていい」と言えば、政治的反逆者として、罠に陥れようとしたのである。

しかしイエス様の切り返し方が実に見事だった。そのような「下心」を見抜かれていたイエス様は、彼らが議論するレベルをはるかに超えてお答えになった。イエス様はまずデナリオン銀貨を持ってこさせて、それに刻印されている肖像が皇帝のものであることを彼らに確認させた。そして「この貨幣は皇帝の貨幣である。それゆえ、それは皇帝に返すがよい」と答えられた。

ここで、貨幣を皇帝に返すということは、単に税金を納めるのがよい、という単純な意味ではない。「返しなさい」の原語は「もとにもどせ」という意味を持つ。それゆえ、富はローマ皇帝に属するのだから皇帝に戻しなさい、と言われているのである。しかし、大切な

ことは次のこと。「神のものは神に」という点である。すなわち、神の所有物は神に帰しなさい、ということ。

人間の支配は、単に外的な生活の支配に過ぎず、人の魂には及ばない支配である。魂に及ぶ支配とは神の支配。貨幣が皇帝の肖像を持つように、人間は神の像を宿している。「神はご自分にかたどって人を創造された」(創世記1・27)とあるように、神の像(イメージ)は人間の魂に刻まれており、私たちは私たちの魂を神に返さなければならない。

確かに聖書でも、支配者の存在は認められている。ローマ13章1節以下には、支配者への従順の必要が記されている。そこに記されているように「国家」という存在も、民衆を治めるこの世の秩序として、神の目的にそった存在として認めなければならない。そしてその国家の存続に必要なもの(税金など)を要求する権利は、国家自身に与えられている。

しかし間違っってはならないのは、決してそれ以上のものを人間から要求し、奪い取ってはならない、ということ。そして神の領域の「魂」の事柄に、国家でも何でも神ならぬものが介入することはあってはならない、ということである。

※斎藤剛毅先生によるバプテスト史の学びより——バプテストの先達であるトーマス・ヘルウィス(ロンドン郊外に、歴史上初めてのバプテスト教会を組織した)が、オランダ滞在中に、「良心に従って守る礼拝の自由」を主張した本を書き、贈る際にイギリス国王ジェームズ1世に添えた言葉がこれである。「聞き給え、わが王よ。貧しき者の訴えを軽んじることなく、彼らの嘆きをあなたの御前に至らしめて下さい。王は神ではなく、死ぬべき人間なのです。それゆえに、あなたの僕(しもべ)たちの魂に対して何の力をも持っておりません。あなたは法を作って魂を服従させることも、彼らの霊的主となることもできません。」

(聖書教育より) 「私たちの持っているもので『神さまのもの』とは何でしょうか。それを『神さまに返す』とはどういうことでしょうか。」(子どもクラス)